



TITLE:

<批評・紹介>大澤正昭著「唐宋變  
革期農業社會史研究」

AUTHOR(S):

渡部, 武

---

CITATION:

渡部, 武. <批評・紹介>大澤正昭著「唐宋變革期農業社會史研究」. 東洋  
史研究 1997, 56(2): 399-406

ISSUE DATE:

1997-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/155130>

RIGHT:

とではなく、「各自がその研究テーマを通じて、検証・確認していくべきものであった」という谷川の指摘は、むしろ現在の研究状況にこそ安當するのではないだろうか。かく思うがゆえに、全體を貫く枠組みが提示されずに終わったことはとりわけ残念であり、おそらくこれは、かつて評者と同じように正編に接した者が等しく抱く思いなのではあるまいか。本書の執筆者をはじめとする中國中世史研究會の會員諸氏が、實證的な成果を基礎にしながら、今後さらに豊かな「中國中世」史像を築かれることを祈念して擲筆することにした。

一九九五年一二月 京都 京都大學學術出版會

A五判 515頁 六四〇〇圓

## 大澤正昭著

### 唐宋變革期農業社會史研究

渡部 武

戦後、わが國の中國史研究者が取り組んだ大きな課題のひとつに、「アジア的停滯論」の克服という問題があった。このような問題意識を持つに至った根底には、中國を含めたアジア諸國の社會性質に對する從來の誤った理解が、わが國を收拾し難い泥沼の侵略戰爭へ驅り立てさせていったという深い反省があった。そして停滯論を打破し新しい中國史研究の立脚點を確立するために、優先して取り上げられた課題が中國史における發展段階の解明、つまり時代區分の問題であった。この時代區分論争は、多くの中國史研究者に研究方法論上における價值觀の轉換を迫ったばかりでなく、世界史の發展法則の中での中國史の位置づけをあらためて考え直させた。その具體的成果として深く印象に残るのは、西嶋定生・守屋美都雄・增淵龍夫・木村正雄といった研究者の間で、眞摯に相互批判を繰り返しながら築かれていった一連の秦漢帝國形成論と、唐から宋にかけての社會性質の變化をめぐる、これを古代の終焉とみなすのか、あるいは中世から近世への開始とみなすのかの、いわゆる「唐宋變革期」論争であった。周知のように後者の論争は、前田直典が土地制度・税制および耕作民の身分等の分析を通じて社會經濟史的觀點から、内藤湖南の中世から近世移行説を承け繼いだ宮崎市定で代表される京都學派に對する批判をきっかけとして起こったものであつ

た。

前田によって問題提起された唐宋變革期論争は、その後、周藤吉之や仁井田陞などの研究者たちに引き継がれる形で展開し、社會經濟史方面からのみならず法制史方面からも精密な分析が加えられるようになった。しかし、宮崎がつよく主張して周藤らの見解をきびしく批判したのは、以下の點であつた。宋代の大土地所有の在り方は、前代のような一圓的な土地所有形態をとることがまれで、ほとんどが零細な小作地の寄せ集めから成つており、したがつてそこで働く佃戸の地主に對する隸屬の度合いも異なり、宋代の佃戸は農奴ではなく自由な耕作民であり、前代の均田制の時代こそ農奴制を伴つた西洋のマナーに似た莊園制が行なわれた時代である、といふものであつた。

やがて、この論争は膠着狀態に陥つてしまふが、一九七〇年代半ばになつて京都大學東洋史研究室の若い研究者たちの間から、この問題についての再検討がなされ始めた。彼らが着目したのは、前近代社會において連綿と耕作活動を續けてきた廣汎な小規模農業生産者（自立小農民）の存在、ならびに人民公社制度を導入した社會主義體制下においても、なお克服し得ない農民たちの「小經營生産樣式」への回歸意識、であつた。つまり彼らは「小經營生産樣式」をキーワードにして、一方で現代の社會主義中國社會が逢着している生産關係における諸問題をにらみながら、もう一方で過去の中國における社會構成と農業生産力を檢證しようと試みたのである。換言するならば、複眼的な觀點から、新しい中國像を模索しようとしたのである（詳しくは中國史研究會編『中國史像の再構成—國家と農民—』文理閣、一九八三年を参照）。

ここに紹介する『唐宋變革期農業社會史研究』は、前述の小經營生産樣式論を檢證する中から生まれてきた成果である。著者の大澤正昭は、當時の京大東洋史研究室に集うた研究會メンバーの一人であつた。側面によると、研究會では中國歷代主要農書を輪讀することと、この問題の分析につとめたやうで、その意味でも從來の研究方法を脱却しようとするメンバーの積極的な姿勢を感じ取ることができる。なお大澤には別著『陳旉農書の研究』（農文協、一九九三年）『埼玉大學紀要（教養學部）』第二二～二四卷、一九八六～八八年に連載した「陳旉『農書』の基礎的研究」を大幅に増補加筆した著作）があり、ここで紹介する本書が考察篇とするならば、この別著は基礎史料篇の一部に相當する。

前置きが少々長くなつてしまつたが、本書を通讀した印象と若干のコメントを記すことにしよう。本書の構成は以下のとおりである（括弧内に示したのは舊稿發表年次）。

## 序章 問題の所在と視角（一九八〇～八三年）

### 第一部 農具論

#### 第一章 スキヤキと犁の發達（新稿）

#### 第二章 『耒耜經』の犁について（一九九五年）

### 第二部 畑作經營論

#### 第三章 唐代華北の主穀生産と經營（一九八一年）

#### 第四章 唐代の蔬菜生産と經營（一九八四年）

#### 第五章 唐宋時代の焼畑農業（一九八七年）

### 第三部 稻作經營論

#### 第六章 唐代江南の水稻作と經營（一九八三年）

第七章 宋代「江南」の生産力評價をめぐって（一九八五年）

第八章 宋代「河谷平野」地域の農業經營について—江西・撫

州の場合—（一九八九年）

補論 唐代後半期の農民諸階層と土地所有—小説史料を中心

に—（一九七七年）

## 結論

全體は三部から構成されているが、大きく区分すると農業技術論と農業經營論に大別できる。かつての中國史研究は税制史や土地制度史などの方面から、各時代の農業生産水準を推し量ろうとした類のものが多く、正面から技術論や經營論に取り組んだ研究は少ない。わずかに天野元之助および『齊民要術』の譯注を行なった西山武一と熊代幸雄らの研究が特によく知られているが、彼らの本來の専門は經濟學や農學であり、東洋史ではなかった。天野の場合は、たまたま滿鐵調查部在職中にレッドパージを被って待機状態におかれたときに、中國古農書の研究に着手するようになったのである。また西山と熊代の場合は、戦前に北京大學農學院の中國農村經濟研究所に職を奉じている時に、『齊民要術』の輪讀會を主催し、戦後、農業總合研究所の東畑精一の強力な支援の下にその譯注を完成した経緯がある。どちらにも共通しているのは、中國現地において農家經濟や在來の農法・農具などを具體的に調査した豊富な經驗を有していたことである。また大陸政策の一環として實施された各種の中國農村慣行調査に若干の東洋史研究者が關與していたが、やはり調査に従事した人の多くは經濟や農學畑出身者によって占められていた。彼らが残した膨大な調査報告資料の中には農業經營分析資

料が多く含まれており、戦後、中國傳統社會の性質分析に充分活用されることなく、埃をかぶったまま閑却されてきたのが實情である。そのような實情を鑑みるならば、大澤の研究は、戦前までに先人たちによって蓄積されてきた研究遺産を再點檢し、その新たな活用の途を拓く意義を有している。

さて、序章で説明されているように、大澤の小農經營生産様式論の研究視點は、農業生産力の發展を構成する三つの要素、すなわち勞働力・勞働手段・勞働對象の分析とそれらの相關關係の檢證にある。具體的には、通時代的に存在してきた「小農民」が再生産の容器および裝置としての土地に對して、どのような生産工具を用いて耕作し、どのようにして地力維持増強に努め、いかなる品種の作物を導入したのかを探り、そこに現われた變化を指針として、生産力の發展を評價しようとするものである。從來、生産手段の所有者の存在形態、つまり主として土地制度や身分制の側面のみが注目されがちであったのを、農民と生産手段との關係、つまり技術的側面と經營的側面に着目することで、所有論および生産關係論を克服しようとしたのである。そしてその目的を達成するために、唐宋時代の農業史料の收集と分析に努め（農書・筆記史料はもとより小説史料にまで涉獵の手を伸ばしたところに特色がある）、勞働手段としての農具である犁の發展をたどり、そして畑作地帯と水稻作地帯における農法と肥培管理技術の問題を取り上げたのである。

第一部の農具論では、中國の犁の發達の問題と唐代の陸龜蒙が著した『耒耜經』のことが取り上げられている。中國における犁の發達については、天野元之助の先驅的研究があり、また私自身も畫像資料を通じて漢代の犁について考察したことがある。中國における

犁の起源問題については、外部傳來説と中國獨自考案説とがあり、いまだに決着がついていない。しかし、戰國末期にはすでに鐵製の犁先を備えた犁型犁が用いられていたと考えられる。また漢代の出土文物より撥土板を具備した犁が存在していたことが判明している。中國の在來犁のタイプは、長床犁と無床犁の區別はあるものの、今日に至るまで犁型犁が主流であり、最大の特色は土壤反轉機能を持していることである。この點がインド犁や西アジア犁との大きな違いである。また曲轅犁の出現は、中國犁の發展史上における一到達點を示すものであり、在來犁の基本的な發達はここで停止している。大澤は『農業考古』に集成された出土犁先資料データを手掛りとして、いくつかのタイプ分類を行ない、各種のタイプの犁先の時代と地域による偏在性を明らかにすると同時に、「長床犁は速く、廣く、淺く耕す農法に適合していたし、無床犁はより強い力で深く耕す農法に適合していた」（五一頁）と結論づけている。

犁の改良と農法の變化および生産性の向上とは密接な關係がある。たとえば、春秋戰國時代の耨作法（畝立て法）は、犁に反轉機能を具備することで圓滑に達成できるようになり、また『汜勝之書』に説かれている平作法（平畝法）は、犁に耙・耨・耨などの整地鎮壓農具が加わることで可能になったと考えられる。ただし生産性の向上の問題については、一具牛に見合うだけの耕作地が確保できてはじめて言えることであって、そのことは、人民公社解體後に地域によっては犁耕から鋤頭一本の耕作法に逆戻りした現象を見たことによっても明らかである。それから大澤は出土犁先の分析の中で、華中・華南地域での出土件數の少なさの原因のひとつとして、「この地域が濕潤地帯であり、そのため鐵製遺物の殘存が困難だっ

たという點も豫想されよう」（五〇頁）と指摘している。この點については私自身もつねづね感じていた疑問であるが、一九九六年に四川地方の在來農具の調査に従事した際、西昌市の涼山州博物館の劉弘館長から、西南中國地方の犁耕の普及は後漢時代後期以降のことであり、それまで使用されていた農具の主流は、鋤や鐵鋤と呼ばれる鋤や鋤であったと教えられた。犁は元來が畑作地帯の農具であり、この農具がどのように水田地帯に普及していったかについては、犁普及以前に用いられていた農具との兼ね合いを考慮してみなければなるまい。

『耒耜經』に説明されている江東犁（牛一頭挽きの曲轅犁）については、私を含めて幾人かの研究者がその構造復元に努めてきた。また犁の構造もさることながら、テキストの末尾に言及されている耕—耙—碌碡の水田土壤處理體系記事は、長江下流地帯の稻作技術水準を知る上ではなほだ貴重である。『耒耜經』のテキストには異本が多く、そのことが犁復元の上で大きな障礙となってきた。大澤はテキストにさらに綿密な検討を加えることによって、新しい復元圖の提示に成功している。犁の復元作業については、これで意見がほぼ出つくした観があるので、今後は在來犁との照合作業を実施し、机上での復元圖が妥當であるかどうか吟味を加える必要がある。というのは、解放以前の中國の傳統的在來農具は、基本的には元の『王禎農書』の記載以上に進歩しておらず、この種の照合作業がきわめて有効だと思われるからである。また半面では、大澤が注意を喚起しているように、「元代以後、商業的農業の時代へと向かうが、農具の改良にはほとんど目を向けられなかった。その意味するところは何であったのか、われわれはしっかりと見極める必要が

あろう」(五七頁)という問題にも抵觸するのである。

第Ⅱ部の畑作經營論では、まず第一に唐代の華北地方における主要生産と多毛作農法を取り上げている。華北における多毛作と輪作とを結合させた、いわゆる「二年三作體系」がいづごろ成立したかについては諸説があり、通常、粟の多様性(早晩熟性や耐旱性など)と小麥の普及とが結びついて、唐代に普遍化したと考えられている。しかし、『齊民要術』を分析した米田賢次郎は、漢代あたりまでさかのぼる新説を提示している(『中國古代農業技術史研究』第Ⅱ部第一章、同朋舎、一九八九年)。その成立問題はさておき、唐宋間の麥作の普及状況をたどる上で、大澤ははなはだ卓越した檢證方法を採用した。それは『冊府元龜』と『宋史』に記録された祥瑞としての「瑞麥」記事に對する着目である。それによると、唐代までの瑞麥の分布は淮水を挟んで以北にみごとに分布し、宋代になると長江流域や四川盆地にまで分布線が南下していく。この變化を麥作の普及に隨伴する現象とみなして、まず問題はあるまい。ただし稻作地帯における麥作については、これが稻・麥の輪作と單純に割切つてよいのかどうか判斷に困難を覺える。というのは陸稻栽培地でないかぎり、水田での裏作に麥を作るには、ある程度の乾田化が進み、田畑輪換を行なえるような状態が要求されるからである。また麥作と一口に言つても、その内譯が小麥なのかあるいは大麥なのかを區別できない問題がある。中國農業史上、大麥の栽培の重要性については、近年考古學者の間で問題にされてきている。ところで、華北の非灌漑地では保水のために中耕と休閒(もしくは休閒耕)が不可欠であり、このことが精耕細作の乾地農法を形成させていくわけであるが、大澤は粟および麥のいずれかに重點をおくかによつ

て、豆類栽培を組み込んだ二つのタイプの二年三作體系(冬休閒タイプと曠作業〔夏耕を伴う肥培管理〕を施す夏休閒タイプ)を提示している。この指摘はきわめて重要である。近年、華北各地で農村調査を實施した田島俊雄の報告によると、降雨の時期と量、土壌の性質、穀稈燃料への依存などの諸條件により、一九五〇年代以前の華北地域では、京漢線(北京—石家莊—漢口)を挟んで以東は、二年に一度冬季に休閒が入る二年三作體系(例、冬休閒—雜穀—冬小麥—大豆)が、また以西では夏季に休閒が入る二年三作(例、冬小麥—休閒—冬小麥—雜穀)もしくは三年四作體系が、それぞれ行なわれていたことを明らかにしており(『中國農業の構造と變動』御茶ノ水書房、一九九六年、一一五頁以下)、これらの耕作體系が大澤の分析により唐代まで遡及できることを示唆している。このような土地生産性の向上によつて、大規模大農法經營(モデルは「二牛・二頃・勞働力一〇人」單位)と小規模大農法經營(同様に「一牛・一頃・五人家族」單位)の雙方が、自立して再生産を維持する條件を獲得したと結論づけている。

第四章は唐代の蔬菜生産と經營についてである。この方面の研究としては、たぶんわが國では初めてのものである。大澤は、主として斷片的な小説史料を總合的に検討することで、唐代の蔬菜栽培が園宅地で自家消費規模でなされていた以外に、蔬菜栽培を専門に行なう農家の出現を明らかにしている。また律令體制下での開元初期の田令の規定では、都市も農村と同一の基準で園宅地の支給がなされていたので、専門栽培農家の分離誕生はそれ以後のことであろうと推定している。その變化の内的要因としては、蔬菜の品種改良、栽培技術の向上、肥料の工夫などをあげ、また外的要因としては、

恒常的な需要が存在し、物流が活潑な都市近郊という立地条件をあげている。このような条件下で貨幣經濟と結合した小農法的經營も、集約的農法を迫及することで高い生産力を確保できたという。その農法や蔬菜の種類や品種栽培の變化であるが、大澤が主として用いた史料は北魏の農書『齊民要術』と唐宋五代の農書『四時纂要』で、後者は前者の記事を多く踏襲しているにもかかわらず独自の記事をかなり掲載しており、そこに前代よりさらに進歩した農業の技術や水準を読み取ろうとしている。すこし補足しておく、蔬菜の種類を調べるのであれば、歷代本草書の檢索も有効である。その點については、杉山直儀の「中國本草書、農書の中の野菜」(『農業および園藝』六三卷六一二號、一九八八年)という勞作があることを紹介しておくたい。

第五章は唐宋時代の焼畑農業についての論考である。この中國焼畑の歴史的研究については、明清時代の方志史料を涉獵した千葉徳爾の研究、および佐竹靖彦・塚田誠之の關連研究があるのみで、わが國における研究蓄積はきわめて薄い。大澤が着目したのは、「畚田」という焼畑用語である。この用語自體すでに先秦時代の文獻に見られ、開墾して二、三年目の耕地および焼畑の兩義があるが、後世「盛唐以降、かつての低地焼畑がほぼ忘れられた結果、焼畑の分布地域は狭まり、ある地域獨特の風俗としての焼畑、という理解が一般化した」(一六五頁)、つまり山地それも深部に殘存していた焼畑とみなしている。この焼畑方式は當然土着民族とも深い關係を有し、大澤はそのことについても言及している。しかし、この數年來西南中國の山地焼畑を觀察調査してきた私にとって、この論文から受ける印象は、焼畑農法自體が開發によって追いやられた退嬰的農

法のように映り少々違和感を覚える。私の調査經驗によれば、土着諸民族は一定の棲み分け原則によって生活圏を形成し、焼畑農法は生態環境によく順應した農法であり、人口膨張や外部勢力の壓迫さえなければ、焼畑はかなり永續性のある再生産手段である。大澤が苦勞して收集した焼畑の記録は、まとまった方志史料を缺く唐宋時代の農業史料として確かに貴重である。これらの記録の多くが、現在認定されている少數民族のいずれかの祖先たちに屬する焼畑記録であつたとするならば、問題は彼ら自身の手によって殘された記録ではないという點にある。したがって唐宋時代の山地焼畑の記録増加現象は、この時代に「農業生産の基本的類型が固まりつつあつた事實を示す」(一八三頁)のではなく、中央政府の支配勢力が山地諸民族の生活圏の至近距離にかなり迫つた現われと解釋できないであらうか。すると次の問題として、中國高文化の形成に參與した諸地方文化のうち、中國高文化の内部には取り込まれることなく、變化しつつ周邊に残つた邊境民族文化、いわゆる少數民族文化との關連で、大澤の抽出した焼畑記録を再檢討する必要性が生じてくる。その方法論としては、大林太良の研究「中國邊境諸民族の文化と居住地―ユーバーハルト説の評価と紹介―」(『國立民族學博物館研究報告』二〇卷二・三號、一九九五年)が役に立とう。

第三部の稻作經營論においては、まず第六章で唐代江南(とくに長江中・下流地域)の水稻作の技術水準と經營について考察が加えられている。古來より中國では、水利灌漑施設の建設やその水量調節が國家の權限、監督下にあり、ウィットフォーゲルの言うところの「水力社會(hydraulic society)」の性格を強く有している。したがって灌漑施設の建設記録をたどることによって、國家權力によ

る農地開拓の進展状況を把握することが可能となる。大澤はこの點に着目し、水稻作と關連の深い淮南・江南・劍南道の灌漑施設工事の變遷を検討し、Ⅰ期（唐初～睿宗朝）・Ⅱ期（玄宗～代宗朝）に劍南道の工事の九割近くが行なわれたのに對して、江南道と淮南道の工事の半ば以上はⅢ期（德宗朝以降）に實施されたことを明らかにしている。同様の統計結果は李伯重によっても指摘されている（『唐代江南農業的發展』農業出版社、一九九〇年、七七頁以降）。

問題はその施行地であるが、淮南道では大運河周邊に集中し、他方、江南道ではⅠ期には六朝期までに開發されていた潤州周邊および錢塘江上中流域で行なわれていた工事が、Ⅱ期以降次第にその周邊へと擴大されていっている。そしてⅢ期には浙東地域および太湖と鄱陽湖周邊がその對象地域となっていた」（二二二頁）とし、さらに太湖周邊のデルタ地帯は開發途上にあったと斷定している。

そして水田開發のフロンティアに位置していた、前述の『耒耜經』の著者陸龜蒙が經營する莊園（數箇所）に農地が分散）を検討すること、唐末の小規模大農法的經營を行なう地主像を素描している。

第七章と第八章は宋代の江南開發をめぐる生産力評價と地域研究である。とくに第七章では、太湖周邊デルタ地帯の先進性と生産力の高さを謳歌したとされる農諺「蘇・湖熟れば天下足る」について、慎重な再吟味を行なっている。この再吟味は、一九七九年に渡部忠世が中心となり京大東南アジア研究センターによって主催された「江南デルタ・シンポジウム」に觸發されたものである。このシンポジウムの記録は『中國江南の稻作文化―その學際的研究―』（日本放送出版協會、一九八四年）という報告書の形で公刊され、専門家はもとより一般讀者に大きな知的刺激を與え、學際的研究の重要性を

あらためて認識させた。大澤が前述の農諺の實像解明のために、シンポジウム記録から抽出した宋代江南における生産力の發展の具體的検討内容は四つある。すなわち、①圩田・團田のような大規模な水利田開發、②占城稻の廣汎な展開および二毛作の普及、③多量の上供米の產出、人口増加等の現象、④『陳旉農書』に代表される高度な技術がそれである。彼が言わんとするところを結論から先に述べるならば、浙西デルタ地帯を舞臺とした前述の農諺は、外見的には穀倉地帯の讚美のように映るが、じつは當地域の農業生産の不安定性をものがたつたものとしている。そしてとくに注意を喚起している點は、宋代の「江南」と言った場合、太湖周邊の浙西デルタ地帯のみに注目するのは片手落ちであり、それよりむしろ兩浙路や江南東西路地域の研究が重要であること、また斯波義信の研究成果に示されているように、江南の開發は河谷扇狀地↓上部デルタ↓下部デルタの順序で進行していったので、河谷平野の農業生産を見落してはならないことなどである。そして、河谷平野部の先進的な農業開發が前提となつて、浙西デルタの本格的開發が可能となつたという假説を立證するため、第八章において、河谷平野の農業經營の事例研究として江西路撫州が取り上げられたのである。じつはこの河谷平野に關連して、私が卽座に想起したのは、一九九二年夏に調査した浙江省臨安縣於潛鎮地域である。この調査は、南宋の樓璣によつて描かれた「耕織圖」の人文地理環境を把握するために實施したものだが、當地方はまさに大澤の言うところの河谷平野の眞っ直中に位置している。従來「耕織圖」はもっぱら農耕技術史方面から注目され、先進的な河谷平野の農業經營に結びつけて説明されることはなかつた。大澤の研究により、新しい角度からの「耕織圖」の再



検討の方途が開けてきたのである。

それから第七、八章にしばしば言及されている占城稻に對する歴史的評價であるが、大澤は前述の江南稻作シンポジウムでの見解、すなわち占城稻はアウス（インディカ）の中で比較的感光性の弱い早生の一群）に屬し、マージナルな地域の開拓の先兵としての役割をもつと同時に、中稻・晩稻との組み合わせによって二期作普及の原動力となったという見解に賛意を示している。しかし、浙江農業大學の游修齡教授の最近の研究によれば、歴史文獻に記された占城稻に關する記録を、呼稱の字面だけでも占城稻に同定するのはきわめて危険であり、また熟期についても中稻・晩稻種があつて、整合性を有する明快な結論を出すことは困難であるとしている（「占城稻質疑」、『稻作史論集』中國農業科技出版社、一九九三年所收）。この問題については、在來稻を遺傳學的方法によつて精力的に分析している佐藤洋一郎のような自然科學者の力を借りて、あらためて共同討議する必要がある。

最後の補論においては、唐代後半期の農民階層と土地所有が分析されている。使用史料の主たるものは、唐代の傳奇小説類である。これらの史料群を用いた理由は、その作者たちがおおむね低い官位の官僚層出身で、より民衆に近い立場から市井生活の實情を描寫していると判斷したからである。そして大澤は、膨大な小説史料の叢林に分け行つて關係資料を博搜した結果、農民諸階層を以下の四つに分類している。①莊園主等の土地所有者に身分的に隸屬する、奴・家僮・莊客などの語で表現される人びと、②莊園主等に隸屬することなく、傭耕・傭作などの雇傭勞働の形で農業に従事する人びと、③獨立した土地所有者で、家族勞働力および若干の短期的勞働

力を利用して再生産を行なう自立小農民層、④「莊」という語で表現されるいわゆる大土地所有を實現しているか、あるいは①や②の長期的勞働力を利用することによつて經營を成り立たせている階層。この中で①の範疇に屬する莊客について、かれらが家族を形成しある程度の私有財産を所持していたことを明らかにしたのは、きわめて重要である。ただ彼らが宮崎の指摘する唐代の部曲と、あるいは濱口重國が法制史研究方面から開拓してきた良賤制とそれぞれのように關わってくるのかの見解が示されておらず、その點については今後の研究課題であらう。それから③の自立小農民一家族當たりの耕地面積を一〇畝、數頃、勞働力は家族規模から若干の雇傭勞働者導入規模までと算定し、都市經濟および貨幣經濟の強い影響下にあつて、彼らは自立の基盤をさらに強固にしていたと考察している。

以上、本書の内容を章を追つて紹介し、若干のコメントを附してきた。取り扱われている問題はきわめて多岐にわたっており、しかも周到な關係史料（資料）の收集と考證がなされ、各章がそれぞれみごとに有機的連關性を保っている。従來、土地制度史や身分制度史の方面から唐宋變革期論争がなされてきたが、ここによりやうく人間の主要な生活基盤である農業生産の方面から、當該問題が體系的に検討されたのである。本書の書名にとくに「農業社會史研究」とことわっている所以は、まさにここにある。

一九九六年七月 東京 汲古書院  
A五判 三三六十三頁 定價八、五〇〇圓